

神奈川県における旧石器時代の遺物分布（その3）

－L1S層～L1H層（まとめ）－

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

当プロジェクトでは、2007年度から遺物分布の集成を行っており、2007・2008の両年度で黒土層からローマ層への漸移層、L1S層、B0層、L1H層の各層位について遺物分布の集成を行った。これらの層位は、時期的には縄文時代草創期から旧石器時代終末期に相当し、2ヶ年で行った集成は、82遺跡、603箇所の集中地点である。

今後、B1層以下の各層位についても集成作業を継続する予定であるが、今年度は、これまでに集成を行った漸移層～L1H層の各層位の石器集中についてのまとめとして、石器集中の分布範囲（規模）や分布密度、器種組成、石材組成、各種検出遺構との関係などの検討を行った。（鈴木）

1. 漸移層～L1S層の石器集中

ここでは黒土（FB）層～L1SM層を対象とし、相模野編年（諏訪間 1988・2001以下同）の段階X（細石器を伴う段階）、段階XI（槍先形尖頭器・石斧等を伴う段階）、段階XII（有舌尖頭器・石鏃等を伴う段階）にあたる。本段階の石器群を検討するにあたり、報告書において「IIIc～IV（漸）」・「IIIa～IIIc（漸）」・「IIIbL～漸」・「IIIb～L1S」・「IIIbL～L1S」・「IIIbL～L1SU」・「3L～5U」・「Va～VI」・「VI」・「VIc～VII（漸）」・「VI～VIII（漸）」・「FB」・「FBL」・「FBL～漸移」・「漸」・「FB～L1S」・「漸～L1S」・「漸移～L1S」・「L1SU」・「L1S」・「L1SU～M」・「L1SM」の記載層位を対象とした。石鏃、有舌尖頭器、槍先形尖頭器・石斧、細石器の順にそれらの器種を伴うか、もしくはそのいずれかに関係する石器（例えば船底形石器）を伴うかによって石器群の石器集中を中心に論じる。

a) 石器集中の器種組成

石鏃（「局磨鏃」を含む）を伴う石器集中は花見山（縄：以下、遺跡名後の括弧付き「縄」や「草」及び括弧無しの場合は「文化層」を表示）（遺跡No.31：以下、括弧内冒頭の算用数字は前号までの遺跡No.で、No.を省略し、算用数字のみ表示）、長堀北I（85-No.1（各集中地点No. 括弧内-No.後の算用数字は各集中地点を表示））、吉岡B区（草2）（101-No.1）、吉岡C区（草）（102-No.1・No.5）、三ノ宮・下谷戸I（166-No.1・2）の5遺跡、7石器集中がある。

石鏃を伴う石器集中の分布状況を一つの石器群における石器集中数とすると最大2箇所、最小1箇所、平均は1.4箇所である。その石器集中で石器点数が最も多いのは三ノ宮・下谷戸I（166-No.1）の53,696点で最も少ないのは吉岡C区（草）（102-No.1）の7点である。その分布範囲は、長軸（m）×短軸（m）の面積（m²）とした場合（以下分布範囲は同算出法による面積を示す）、最小が吉岡C区（草）（102-No.5）の3.51m²から、最大が花見山（縄）（31）の1,591m²までとなる。

石器点数と分布範囲（面積）の関係では相関関係はみうけられず、三ノ宮・下谷戸I（166-No.1）のように石器点数が多く、分布状態で「密集」（510m²）と捉えられる石器集中がある一方、吉岡B区（草2）

(101-No.1)のように石器点数(31点)が少ないが、「密集」(200m²)と捉えられる石器集中もある。とはいえ分布範囲(面積)が500m²以上であれば、器種組成における構成器種の種類が多くなるといった傾向がうかがえる。注目すべきは石鏃を伴う石器集中7集中のうち、6集中が槍先形尖頭器を伴う石器集中であることである。石鏃と槍先形尖頭器が組み合わせとして意味を持つかどうかは、今後の詳細な出土状況の検討を要する。

有舌尖頭器を伴う石器集中は、柏ヶ谷長ヲサ(縄)(74)、月見野上野第1地点I(81-No.2)、吉岡C区(草)(102-No.15)、吉岡D区(草)(103-No.1)、代官山I(109-No.K)、慶應義塾藤沢校地内(草2)(118-No.A・No.B①(12.0×9.0)・②(15.0×12.0)③(46.4×31.0)・No.C・No.D・No.E)、原口(縄)(171-No.1・2)、月見野上野第5地点I(325-No.1)、遠藤山崎(草)(341-No.1・2)、万福寺1(草)(358)、万福寺2(草)(358)の19石器集中がある。有舌尖頭器を伴う石器集中の分布状況を一つの石器群における石器集中数とすると最大7箇所、最小1箇所、平均は約1.7箇所である。その石器集中で石器点数が最も多いのは万福寺1(草)(358)の3,228点、最も少ないのは月見野上野第5地点I(325-No.1)の2点である。その分布範囲は、最小が吉岡C区(草)(102-No.15)の4.2m²で、最大が原口(縄)(171-No.2)の7,800m²となるが、2番目は慶應義塾藤沢校地内(草2)(118-No.B③)の1438.4m²である。石器点数と分布範囲(面積)では相関関係はみうけられず、万福寺2(草)(358)のように、石器点数が719点で、分布状態で「集中」(80m²)と捉えられる石器集中がある一方、遠藤山崎(草)(341-No.1)のように石器点数が576点で、分布状態で「やや密集」(475m²)と捉えられる石器集中もある。注目すべきは分布範囲(面積)の大小に関係なく、有舌尖頭器を伴う石器集中19集中、10集中が槍先形尖頭器を伴う石器集中であることである。これは相関がありそうである。

槍先形尖頭器・石斧を伴う石器集中は、槍先形尖頭器か石斧以外に石鏃、有舌尖頭器、細石器を伴わない石器集中で、栗原中丸I(70-No.3・4)、月見野上野第1地点(81-No.8・10・11・16・20・26)、長堀北II(85-No.5・8)、深見神社南I(89-No.1)、寺尾I(96-No.1・5・7・9・10・12・14・16・19・21)、吉岡A区(100-No.1・2、No.なし(FBL～漸移層))、吉岡C区(102-No.2・3・6・11・13・14)、吉岡D区(草)(103-No.2・4)、代官山I(109-No.D)、南葛野(草)(116-No.1・2)、慶應義塾藤沢校地内(草2)(118-No.E)、宮ヶ瀬北原No.10・11北(129-No.1～4)、宮ヶ瀬馬場No.6(131-No.2・4・7)、宮ヶ瀬南(132-No.1・2)、原口(縄)(171-No.3・4)、下森鹿島I(216-No.2・9・18・21・26)、藤沢市No.419(草)(219-No.1)、藤沢市No.419第1地点(草)(219-No.1)、葛原滝谷(草)(336-No.1)、遠藤山崎(草)(341-No.3)、下鶴間城山I(354-No.3)の64石器集中がある。槍先形尖頭器か石斧を伴う石器集中の分布状況を一つの石器群における石器集中数とすると最大10箇所、最小1箇所、平均は約3.0箇所である。その石器集中で石器点数が最も多いのは吉岡A区(100-No.なし)の862点、最も少ないのは宮ヶ瀬馬場No.6(131-No.2)・代官山I(109-No.D)・深見神社南I(89-No.1)の2点である。その分布範囲は、最小が吉岡C区(102-No.9)の0.27m²で、最大が吉岡A区(100-No.2)の39,900m²となるが、2番目は吉岡A区(100-No.なし(FBL～漸移層))の800m²である。石器点数と分布範囲(面積)では相関関係はみうけられず、吉岡C区(102-No.11)のように石器点数が552点で、分布状態で「密集」(77.3m²)と捉えられる石器集中がある一方、吉岡A区(100-No.なし(FBL～漸移層))のように石器点数が862点で、分布状態で「密集」(800m²)と捉えられる石器集中もある。分布状態(面積)や石器点数に関係なく、槍先形尖頭器か石斧を伴う石器集中64集中のうち、槍先形尖頭器と石斧を伴う石器集中は5石器集中

で、このうちで更に礫器を伴う石器集中は2石器集中ある。槍先形尖頭器に礫器を伴う石器集中は8石器集中あるが、石斧に槍先形尖頭器を除いて礫器を伴う石器集中はみあたらない。また槍先形尖頭器に石核を伴う石器集中は9石器集中あり、石斧に剥片を伴う石器集中は4石器集中ある一方、石斧に石核を伴う石器集中はみあたらないといった傾向が看取される。これらのことから槍先形尖頭器は礫器や石核と共伴し、石斧は剥片と共伴する傾向が高いように思われる。このことは資料数が少ないながらも槍先形尖頭器・石斧を伴う石器集中を単位とした場合に抽出される石器組成のあり方を考える上で極めて重要な要素になりうる。また、槍先形尖頭器を伴う石器集中58集中のうち、約1割を占める6石器集中で搔器・削器・石核を伴い、約3割を占める18石器集中で搔器か削器を伴う石器集中であり、着柄に関連する場を想定できようか。

細石器（船底形石器を含む）を伴う石器集中は、勝坂（第45次）（67-No.1）、月見野上野第1地点（81-No.1・2・6・7・9・13・14・19・22・24・30・31）、長堀北Ⅱ（85-No.1～4・7）、上和田城山（1、2次）Ⅰ（90-No.6区1・6区2）、寺尾Ⅰ（96-No.4・11・13・17・18・20）、吉岡B区（101-No.1～4）、吉岡C区（草）（102-No.4）、下溝上谷開戸（357-No.6）の29石器集中がある（吉岡B区101はNo.1～4の4つの石器集中として前回までにデータ集成したが、これらの記載はいずれも全く同じであることから本稿では一つの石器集中として扱う）。細石器を伴う石器集中の分布状況を一つの石器群における石器集中数とすると最大12箇所、最小1箇所、平均は約3.6箇所である。その石器集中で石器点数が最も多いのは吉岡B区の3,618点でこの石器集中をNo.1～4の4つに均等割りした場合でも一つの石器集中の石器点数は約900点を占める。石器点数が最も少ないのは下溝上谷開戸（357-No.6）の2点である。その分布範囲は最小が月見野上野第1地点（81-No.6）・下溝上谷開戸（357-No.6）の1㎡で、最大が長堀北Ⅱ（85-No.7）の44㎡であることから、最小と最大で50㎡も差がないという結果となった。このことは細石器を伴う石器集中は極めて限定された範囲に分布するという石器分布の特徴が捉えられるが、石器分布をそのように捉えてしまう「細石器」という石器の性状自体が分布範囲を捉える際にも影響しているとも考えられる。今後、石器分布の範囲を考える上では石器性状の違いによって捉えられる石器分布の範囲が異なる可能性も考慮しなければならぬ。石器点数と分布範囲（面積）では相関関係はみうけられず、寺尾Ⅰ（96-No.20）のように石器点数が473点で分布状態で「密集」（17.6㎡）と捉えられる石器集中がある一方、月見野上野第1地点（81-No.24）のように石器点数が46点で、分布状態で「密度が低い」（14.4㎡）と捉えられる石器集中もある。本石器集中29石器集中のうち、細石刃に槍先形尖頭器を伴う石器集中は16石器集中あり、船底形石器か細石核に槍先形尖頭器を伴う石器集中は12石器集中あり、その両者を伴う石器集中は8石器集中ある。このことは細石器が槍先形尖頭器と共伴することを石器集中を単位としてより強く認識せざるをえない状況が想定される。他に細石器（細石刃）に槍先形尖頭器のみならず、石斧を伴う石器集中は寺尾Ⅰ（96-No.18）の1石器集中があり、船底形石器を細石器関係の所産と考えてこれに槍先形尖頭器と石斧を伴う寺尾Ⅰ（96-No.20）の石器集中を含めた場合、2石器集中を数えるが、寺尾遺跡に限定されたあり方である。

b) 石器集中と石材組成

石鏃を伴う石器集中の石材組成は7石器集中のうち、安山岩・ホルンフェルスをいずれの石器集中でも含み、凝灰岩を含む石器集中が6石器集中あり、次いでチャート・黒曜石の5石器集中、頁岩の4石器集中となる。三ノ宮・下谷戸Ⅰ（166-No.1・2）や長堀北Ⅰ（85-No.1）等の石器集中でも黒曜石は主体的な石材でないことが確認される。有舌尖頭器を伴う石器集中の石材組成は19石器集中のうち、安山岩（ガラス質黒色・細流・輝石安山岩等を含む）もしくは凝灰岩を含む石器集中が13石器集中、頁岩（珪質・黒色頁岩等

を含む)を含む石器集中が10石器集中あり、これらの石材が石器集中の主体を占めることが確認される。本石器集中では黒曜石が主体を占める石器集中はみうけられない。槍先形尖頭器・石斧を伴う石器集中の石材組成は63石器集中(1石器集中が不明のため)のうち、凝灰岩を含む石器集中は48石器集中、安山岩を含む石器集中は42石器集中、黒曜石を含む石器集中が27石器集中、粘板岩を含む石器集中は22石器集中、砂岩を含む石器集中は21石器集中、頁岩を含む石器集中は14石器集中である。全ての石材に数量の記載があるわけではないため詳細は不明となるが凝灰岩か安山岩が石器集中の主体となる石材である可能性が示唆される。月見野上野第1地点(81-No.10・11・16・20)の4つの石器集中のように砂岩を主体とする石器集中や南葛野(草)(116-No.2)石器集中のように黒曜石を主体とする石器集中もあるが、黒曜石を主体とする石器集中は総点数5点にとどまる。注目すべきは寺尾I(96-No.1・5・7・9・10・12・14・16・19・21)の10石器集中の石材組成がいずれも凝灰岩、安山岩、黒曜石、粘板岩、砂岩、頁岩の6種類の石材のみで構成されていることである。これらの石材の組み合わせが一つの遺跡に限定される石器集中でもあることから何らかの特殊な場の機能を反映している可能性も考えられる。細石器を伴う石器集中の29石器集中のうち、黒曜石・砂岩を伴う石器集中は20石器集中、凝灰岩を伴う石器集中は18石器集中、安山岩を伴う石器集中は14石器集中、チャートを伴う石器集中は13石器集中、粘板岩を伴う石器集中は12石器集中である。また、寺尾I(96-No.4・11・13・17・18・20)の6石器集中のうち、5石器集中の石材組成がいずれも凝灰岩、安山岩、黒曜石、粘板岩、砂岩、チャートの6種類の石材のみで構成されている。

c) 石器集中と遺構分布

石鏃を伴う石器集中では三ノ宮・下谷戸I(166-No.1・2)、花見山(縄)(31)等のように石器点数が多く、分布範囲が広い石器集中で遺構もしくは土器を伴うことが確認される。有舌尖頭器を伴う石器集中では19石器集中のうち、吉岡C区(草)(102-No.15)、月見野上野第5地点I(325-No.1)等のように石器点数が少なく、分布状態が密集と捉えられない石器集中以外では遺構もしくは土器を伴うことが確認される。槍先形尖頭器・石斧を伴う石器集中では約半数の35石器集中で遺構もしくは土器を伴わない石器集中だが、その石器集中は石器点数が少なく、分布状態が散漫である。伴う土器には隆線文・爪形文・無文土器等がある。細石器を伴う石器集中では約7割を占める19石器集中で遺構もしくは土器を伴い、更に土器を伴う場合には遺構も伴い、その際の土器は無文土器である。遺構もしくは土器を伴う石器集中は石器点数の大小や分布状態と相関性がないあり方を呈している。(井関)

2. L1S層～B0層の石器集中

L1S層～B0層の石器集中であるが、相模野編年では第V期後半(鈴木・矢島 1976)、段階X(細石器を伴う段階)にあたる。本段階の石器群を検討するにあたり、報告書において「L1S層」「L1S～B0層」「L1SL～B0U層」「B0層」「B0U層」「B0M層」「B0L～U層」等の記載のある層位を対象とするがここでは主にL1SL～B0M層を中心とする。また「L1S～B1層」のように層を跨いで出土した遺跡・石器群については基本的に除外し検討対象外とした。遺跡No.62(以下No.省略)、70、71、73、74、81、82、84、85、88、90、91、93、94、97、102、103、109、121、125、126、127、128、154、163、164、165、166、243、325、328、335、355、357の34遺跡33文化層を検討対象とする。石器集中数は78箇所である。

a) 石器集中の器種組成

細石器を伴う石器集中を1つの文化層においてみると最大28箇所、最小1箇所、平均3.8箇所である。石

器集中の最多出土点数は三ノ宮・下谷戸Ⅲ（166- No. 1）の3,977点、最小は代官山Ⅱ（109- No. A）と下溝上谷開戸Ⅱ中（357- No. 7）の2点である。

石器集中範囲は、最小0.11㎡から最大765㎡までである。集中範囲は、10㎡未満が64例と最も多い。10～19㎡が36例、20～29㎡が宮ヶ瀬サザランケⅡb（128- No. 1）（第1図）等10例、30～39㎡が5例となる。40㎡以上の分布範囲は用田鳥居前Ⅰ（335- No. 1～3）（第2図）等24例である。出土範囲と遺物点数の関係では、台山Ⅱ（84- No. 1）のように9.2㎡の範囲から146点出土する例もあるが、分布範囲が10㎡を下回ると出土数が10点以下の箇所が30箇所と、分布範囲と出土点数には概ね比例関係が見られる。遺物分布状態をみると不明（記載無し）、点在、散漫、散在、求心、やや集中、中央集中、やや密、密集、密度濃い（高い）などがある。不明（記載無し）が49箇所と多いが、石器出土数が少数でも密集状態の例はあるものの、石器出土点数と密集の度合い・分布密度にも比例関係が見られる。石器の器種は、細石器を伴う60箇所の石器集中のうち、細石器が多くを占める石器集中が23箇所である。細石器を伴う石器に搔器・削器・彫器等の剥片石器を伴う石器集中は22箇所であるが、このうち搔器のみを伴う石器集中が13箇所あり、削器（削片）のみを伴う石器集中が19（1）箇所、彫器のみを伴う石器集中は僅かに1箇所である。さらに搔器・削器を併せて伴う石器集中は11箇所である。細石器を伴う石器に叩石・磨石・礫器等の礫石器を伴う石器集中は12箇所であるが、叩石のみを伴う石器集中は12箇所あり、磨石のみを伴う石器集中は3箇所、台石のみを伴う石器集中は2箇所、凹石のみを伴う石器集中は2箇所である。さらに叩石・磨石を併せて伴う石器集中は3箇所、叩石・磨石・台石を併せて伴う石器集中と台石・凹石を併せて伴う石器集中は僅かに各1箇所である。細石器を伴う石器集中に剥片石器・礫石器の両者を伴う石器集中は12箇所見られ、器種組成に様々な形態が見られるが、削器・叩石を併せて伴う石器集中が5箇所と半数近くを占めている状態である。これらの器種組成では、細石器及びそれに削器・搔器・彫器等の剥片石器を含む石器集中の多くを占めている。

b) 石器集中の石材組成

本層の細石器を伴う石器集中で主な石材は、黒曜石、凝灰岩、チャート、砂岩、ホルンフェルス、粘板岩、安山岩、頁岩、玄武岩等である。

この段階では黒曜石を伴う石材組成とチャートを伴う石材組成の石器集中があることが知られているが、黒曜石を伴う石器組成の石器集中は27箇所見られ、黒曜石・チャートを伴う石器組成の石器集中は26箇所、チャートを伴う石器組成の石器集中は3箇所、黒曜石・チャート以外の石材を伴う石器集中と石材が不明の石器集中がそれぞれ1箇所見られ、黒曜石を伴う石材組成の石器集中と黒曜石・チャートを伴う石材組成の石器集中がその大半を占めている。また本層では14箇所の石器集中から槍先形尖頭器が検出されているが、細石器を伴う石器集中から槍先形尖頭器が出土した箇所は8箇所である。このうち6箇所は黒曜石を伴う石材組成の石器集中からで、残り2箇所は黒曜石・チャートを伴う石材組成の石器集中からである。細石器を伴う石器群の石材組成から分布や範囲の傾向・差異を読み取ることは石材別の平面・断面分布図を掲載していない報告書が多いため困難である。

c) 石器集中と遺構分布

本層の細石器を伴う石器集中で確認された遺構は、礫群32箇所（以下遺構名後の箇所は省略）、炉址1、木炭集中1、配石状礫1である。これ以外に細石器を伴わない石器集中で確認された遺構は礫群32、配石1である。

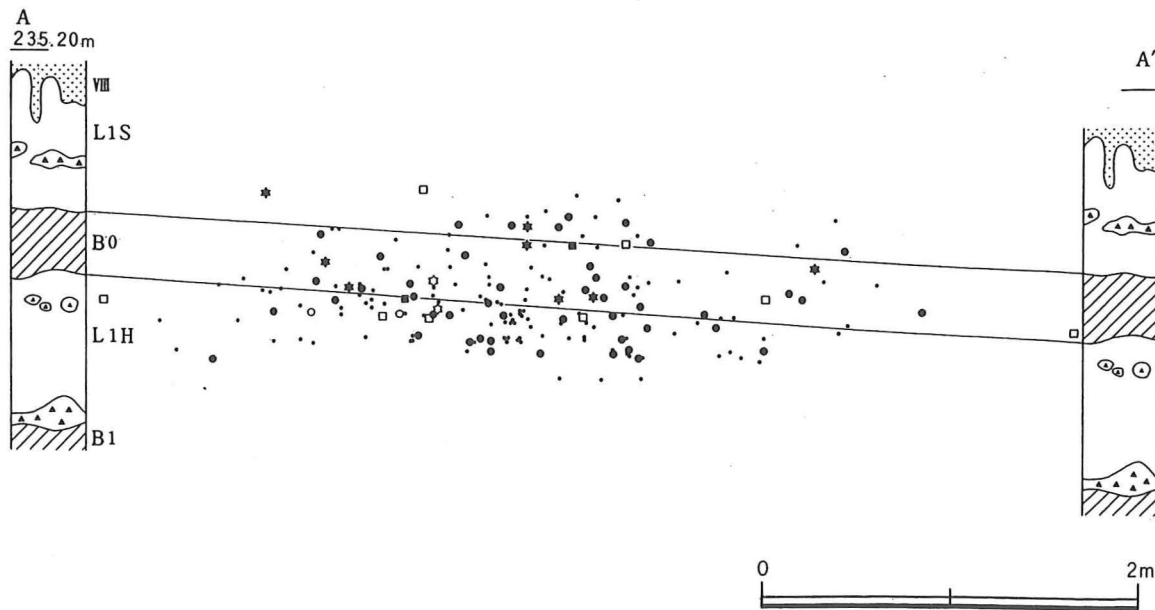
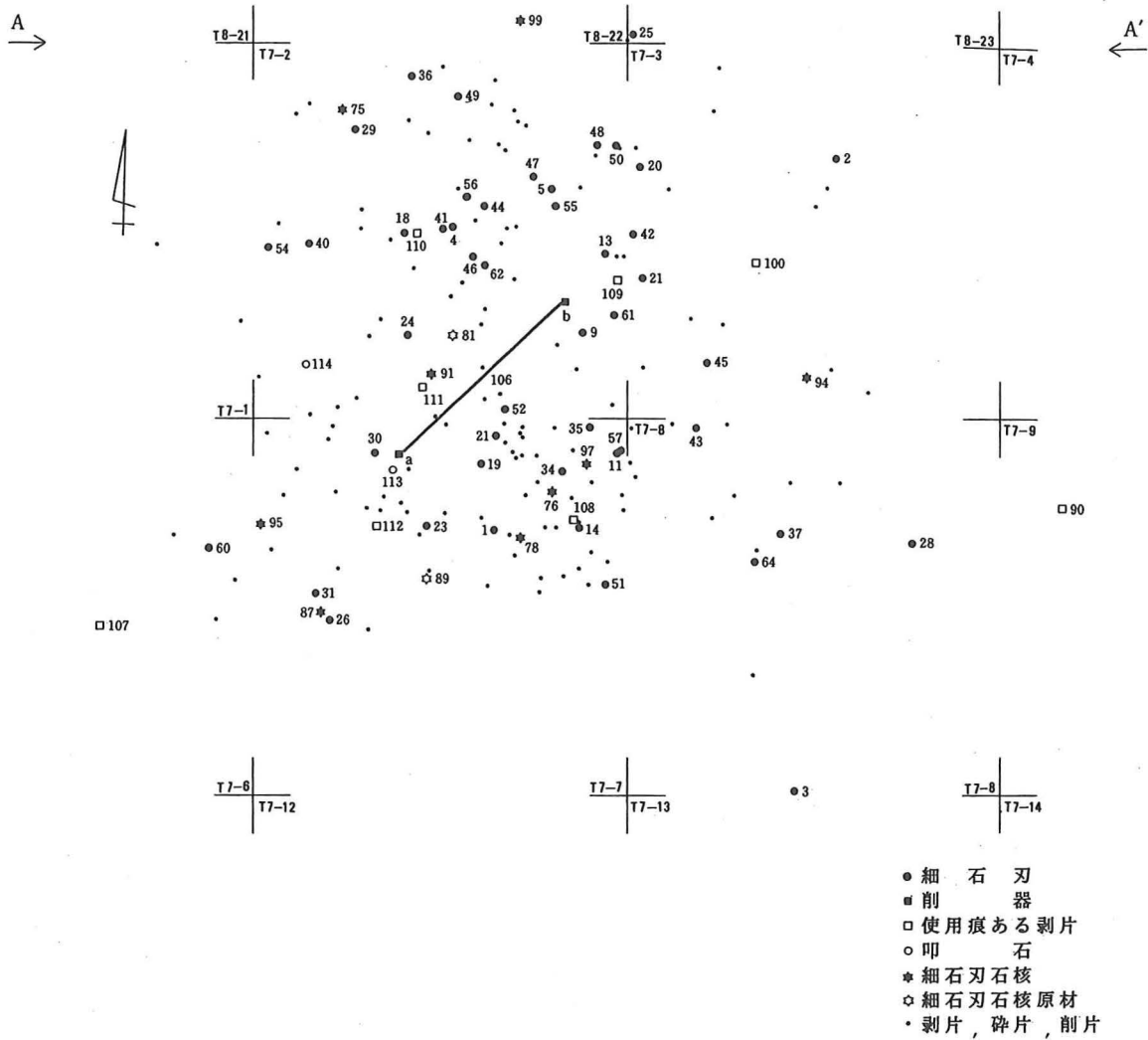
礫群が一番多く見られる遺構であり、他は僅少である。石器集中と重複もしくは一部重複している礫群は

12箇所では独立している。礫群は2m～12mの範囲にまとまって確認される状態が多い。石器集中と礫群との関係は、礫群を伴う石器集中15箇所のうち、細石器を伴う石器集中が8箇所、細石器を伴わない石器集中と槍先形尖頭器・細石器を伴う石器集中はそれぞれ3箇所見られた。

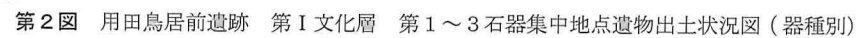
炉址、木炭集中については上和田城山（1、2次）Ⅱ（90-No.4区A・B）でそれぞれ1箇所検出されている。炉址は、Aブロックで、木炭集中はBブロックでの検出である。炉址は5.6m×3.2mほどの範囲の石器集中と平面的・断面的に重複しているが平面では南西寄りに、断面では下底の石器分布の中心からずれて確認されている。炉址の直上には1.2m×0.9mほどの範囲で、木炭片が楕円形状に30cm～55cmほどの厚みを持って堆積している。炉址の北側には10cm～15cmほどの礫5点（被熱の有無は不明）が接して散在しているが断面分布はほぼ平坦である。木炭集中は、8.5m×4.2mほどの範囲の石器集中・破碎礫と平面的・断面的に重複しているが平面ではブロックの遺物が散漫な状態の南側に部分的に、断面では下底の石器分布の中心部分に納まって確認されている。木炭集中の範囲は2.3m×1.7m、厚さ80cmほどの楕円形状で、木炭片は断面分布ではB0層の下部から上部へかけて扇状に放射現象を起こし上昇・拡散する傾向を見せている。木炭集中と部分的に重複し、その北側に散在する破碎礫は、木炭集中との関連性が見てとれる。

配石状遺構は田名塩田B地点Ⅰ（62-No.1）で1箇所、2.4m×1.6mほどの範囲で10cm～50cmほどの大形礫16点（被熱の有無は不明）が環状に検出されている。9.1m×8.3mほどの範囲の石器集中（1号ブロック）と平面的・断面的に重複しているが平面ではやや東側に、断面では下位の石器分布の中心からややずれて確認されている。大形礫の断面分布はほぼ平坦である。配石は柏ヶ谷長ヲサⅢ（74-No.1）で2箇所検出されている。径16mほどの範囲の石器集中に2.8m×1.7mほどの範囲の礫群と、1.9m×0.9mほどの範囲の礫群2箇所が平面的にはやや中心からずれて重複し、さらにこの礫群範囲の中に配石の分布が重なっている。石器集中と礫群・配石の断面的な重複関係については報告書からは捉えられなかった。上記の各遺構は、大多数が石器集中と重複するという傾向が認められる。しかし、細石器を伴う石器集中における礫群は散漫な分布を示している。

（長澤）



第1図 宮ヶ瀬サザランケ (No. 12) 遺跡 第II b文化層第1ブロック遺物分布図



3. B0層～L1H層の石器集中

ここではB0L～L1H層を対象とする。この段階は、相模野編年では第V期。段階Ⅷ（槍先形尖頭器を伴う段階）、段階Ⅸ（細石器を伴う段階）にあたる。本段階の石器集中を検討するにあたり、報告書において「B0L」「B0L～L1H」「L1H」の記載のある層位を対象としている。また「L1S～B1層」といったように層を跨いで出土した石器集中については基本的に除外しているが、石器集中の内容が明確な遺跡については検討対象とした。遺跡No.31（以下No.省略）、48、68、74、80、81、82、85、90、91、94、96、99、103、109、111、118、120、127、128、165、183、185、325、326、328、340、348、352、356の29遺跡、36文化層を検討対象とする。石器集中数は、段階Ⅷで153箇所。段階Ⅸで21箇所である。

a) 石器集中の器種組成

槍先形尖頭器を伴う石器集中からは、ナイフ形石器、搔・削器、彫器、錐器、UF、RF等が確認され、細石器を伴う石器集中も同様の器種組成が見られる。上記器種は、両石器集中とも分布範囲の中心やや外側から出土していることが確認できる。この他、器種別の分布や規模、密度などの傾向や差異について検討したが、それらを見つけることは出来なかった。

次に石器集中の分布・範囲・規模・密度を見ることとする。槍先形尖頭器を伴う石器集中の一遺跡の石器集中数は最大37箇所、最小1箇所、平均6.4箇所である。石器集中の最多出土点数は用田南原Ⅱ（340-No.4）の2,468点、最小は長堀北Ⅳ（85-No.5）（他2遺跡の石器集中あり）の2点である。石器集中範囲は、最小0.08㎡から最大150㎡までである。集中範囲は、10㎡未満が78例と群を抜いて多い。10～19㎡が35例、20～29㎡が14例、30～39㎡が16例となる。40㎡以上の分布範囲は10例である。

出土範囲と遺物点数の関係では、4.3㎡の範囲から441点出土するケースもあるが、150㎡から23点しか出土しないケースもある。範囲と点数は比例関係になく、石器集中の性格・作業内容の違いによると思われる。遺物分布をみると不明（記載無）、点在、希薄、散漫、求心傾向、密集などがある。不明が多いが、少数でも密集状態にあったり、その逆もあったりと「遺物量の多さ＝密集」という関係を見て取ることは難しい。

細石器を伴う石器集中の一遺跡における石器集中数は最大8箇所、最小1箇所、平均3.5箇所である。対象とした遺跡の石器集中の多寡も影響していると思われるが、槍先形尖頭器を伴う石器集中の約2分の1の数である。石器集中での最多出土点数は柏ヶ谷長ヲサⅣ（74-No.1）の717点、最小は吉岡D区Ⅰ（103-No.2）の14点である。石器集中範囲は、最小2.7㎡から最大90㎡までである。集中範囲は、10㎡未満が9例と一番多く、次に10～19㎡が6例と続く。この石器群では20㎡未満のものが7割を占め、30㎡を超えるものは3割である。槍先形尖頭器を伴う石器集中の分布範囲と比較すると、10㎡未満のものが多くは共通するが、20㎡以上の分布範囲が顕著に少なくなっている。出土範囲と遺物点数の関係では、槍先形尖頭器を伴う石器集中と同じように遺物量と分布範囲との比例関係はない。遺物の分布は、密集が多い傾向にある。遺物分布密度が高いと出土点数が多い傾向にあり、槍先形尖頭器を伴う石器集中とはやや異なった在り方をするようである。

b) 石器集中の石材組成

槍先形尖頭器を伴う石器集中に含まれる石材はチャート、粘板岩、硬質砂岩、玄武岩、ガラス質安山岩、黒曜石である。この段階では、黒曜石を伴う石器集中とチャート等の在地の石材を伴う石器集中のあることが知られている。細石器を伴う石器集中に含まれる石材は黒曜石、安山岩、凝灰岩、頁岩、チャート、頁岩で、黒曜石が圧倒的に多い。槍先形尖頭器を伴う石器集中では同一遺跡内にある石器集中毎の石材組成の変

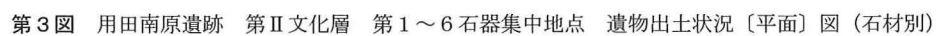
化は少ないが、中村Ⅲ（68-No.1～14）や月見野上野第1地点Ⅳ（81-No.1～37）では一遺跡内で確認された各石器集中において、それを構成する石材の種類が多いと、槍先形尖頭器の点数が多い傾向が見られた。中村Ⅲでは石材平均3.7種類に対し、槍先形尖頭器を含む石器集中の平均は4.7種類。月見野上野第1地点Ⅳでは平均3.7種類に対し、槍先形尖頭器を含む石器集中平均は4.5種類であった。石材組成の分布や範囲については、点数の多い石材が中心部に分布するのに対し、数量が少ない石材は、外縁に分布するという傾向が用田南原Ⅱで認められた（第3図）。なお石材別の平面分布図を掲載していない報告書が多いため、即断出来ないが、他の遺跡でも同様の傾向が見られる可能性がある。

細石器を伴う石器集中の石材組成は、代官山Ⅲ（109-No. A～G）のように石器集中の石材の全てが黒曜石のみで構成されているものは多くはなく、黒曜石に加えて安山岩、凝灰岩、チャートが混じるという石材組成をしている。これらの石器集中についても、上記と同じ理由で情報を読み取ることは困難であった。

C) 石器集中と遺構分布

槍先形尖頭器を伴う石器集中で確認された遺構は、礫群58、炭化物集中5、石囲炉2、配石1である。槍先形尖頭器を伴う石器集中で礫群が一番多く見られる遺構であり、石囲炉・配石は僅少である。礫群は、1つの石器集中と重複、もしくは一部重複していたり、幾つかの石器集中に跨り重複している。独立した礫群もあるが、多くはない。礫群は1m～3mの範囲にまとまって確認されるケースが多い。炭化物集中は、石器集中と重複しているが、中心からは、ややずれて確認され、単独分布もある。石囲炉・配石は、宮ヶ瀬サザランケ（No.12）Ⅲ（128-No.3 4）で確認されている。石囲炉は2例あり、いずれも石器集中と重複している。また石囲炉の1つは、配石と近接している。

（脇）



おわりに

今回対象とした時期は細石器石器群を中心とするその前後に相当する。下層からは、1・L I H層～B O下部層の槍先形尖頭器の展開と細石器の発生と展開初頭、2・B O層中部～L I S層下部の細石器の発展期、3・L 1 S層中部～F B層の在地系細石器の終末と削片系細石器の進出と縄文時代相草創期に該当する。

この間の槍先形尖頭器の分布は細石器群よりも広範で礫群は散漫化し、細石器石器群石器分布は集中的で礫群の散漫化を継続し、配石をままた伴ってくる。石材組成では細石器石器群の黒曜石の偏在性が多様化し、縄文時代草創期へと継続する。器種組成は細石器石器群と搔器・削器・礫器の伴い方が、草創期での槍先形尖頭器との伴い方に継続、石斧と剥片の伴い方や集中地点と石材組成の特異性が際立ってくる。これらの集中地点の規模と礫群・配石の設備、特定器種間の結びつきは、石器石材の選択、動植物素材の利用と狩猟具・加工具のメンテナンスなど、環境利用と土地改変にまで及ぶ器種形態を超えた場の機能が想定される。今回集成した遺物分布に関する各属性の検討は今後もおこなわれる。(砂田)

引用・参考文献

旧石器時代研究プロジェクトチーム 1996～2001 「旧石器時代後半における石器群の諸問題」『研究紀要1～6』

財団法人かながわ考古学財団

旧石器時代研究プロジェクトチーム 2002～2007 「神奈川県内における旧石器時代の遺構」『研究紀要7～12』

財団法人かながわ考古学財団

旧石器時代研究プロジェクトチーム 2008～2009 「神奈川県における旧石器時代の遺物分布」『研究紀要13～14』

財団法人かながわ考古学財団

鈴木次郎・矢嶋國雄 1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1 神奈川考古同人会

諏訪間 順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について ― 層位的出土例の検討による石器群の段階的把握 ―」
『神奈川考古』24 神奈川考古同人会

諏訪間 順 2001 「相模野旧石器編年の到達点」『考古学講座 相模野旧石器編年の到達点』神奈川県考古学会